

学 年	教科等	題材名	日 時
第5学年	家庭科	食べて笑顔に（全12時間）	令和7年10月27日(月)

1 本時の目標

よりおいしいご飯を炊くために、調理計画を見直すことができる。

2 指導過程

学習活動及び学習内容（★は評価にかかわるもの）	「自律的に学ぶ」ための手立て
1 実践①をふりかえり、本時のめあてを設定する。 ○ 上手くいったこと・改善点 ・「少し、ぱさぱさになってしまったから火加減が大事だと思った。」 ・「べちゃっとしてしまったから、弱火だけでは上手くいかないことが分かった。」 等 ○ 本時のめあて よりおいしいご飯を炊くために、調理計画を見直そう。 2 2種類の加熱の仕方から、おいしいご飯の炊き方に適している方を選び、その理由を考える。 ○ 教科書の加熱の仕方（強火→中火→弱火） ・「強火は、沸騰するまでが短時間だから、すぐにできそう。」 ・「お米がかためになりそうだな。」 ○ 給食室の加熱の仕方（弱火→強火→中火） ・「じっくり火が通るから、もちっとしそう。」 ・「時間がかかるかもしれないな。」 3 全体で共有しながら、それぞれの加熱の仕方の特徴について考える。 ○ それぞれの加熱の仕方の特徴 〈対話例〉 A「強火から始めるよさは、短時間でできることだと思うな。」 B「でも強火が長いと、おこげができて、食べられないところがあったよ。」 C「ぼくは、おこげが好きだから、強火から始めるといいと思う。おこげができそうなときは、中火や弱火にして調整すればいい。」 4 グループで計画の見直しを行う。（★） ○ 実践②に向けた計画 ・「前は強火から始めてみたら、少しぱさぱさに感じたから、今回は、弱火から始めてみたいな。」 ・「弱火から始めると、時間がかかりすぎたから、強火から始めてみたい。」 等 5 本時の学習をふりかえる。 ○ 計画の見直し ・「実践①は弱火から始めると、時間がかかってしまった。仲間の考えを聞いて、実践②は強火から始めて、時間内においしいご飯を炊くことができるようにしたい。」	○ 実践①の上手くいったことや、改善点をふりかえり、その要因について共有することで、「加熱の仕方」について問題意識をもち、本時のめあてへとつなげることができるようにする。 ○ 教科書に載っている加熱の仕方と、給食室で行っている加熱の仕方を提示し、どちらがよいかを選ばせることで、実践①等を想起しながらよりよいと思う方を判断することができるようにする。 ○ 理由を考える際、「生活経験」「実践①」「既習事項」等を想起ながらよりよい加熱の仕方を判断しようとしている子どもを価値付けることで、より多くの子どもが根拠をもつことができるようにする。 ○ 全体で共有していく際に、「時間」「食感」等の視点に分けて板書していくことで、それぞれの加熱の仕方の特徴を意識し、考えを広げることができるようにする。 ○ 「短時間で炊きたい」と思っている子どもに、「強火で炊き続けるとよいのではないか。」と問い返すことで、強火だけではなく、弱火等と組み合わせることの意味について考えることができるようにする。 ○ 加熱の仕方について、「食感」「時間」等の何を優先するのかといった視点を与えることで、よりよいと思う加熱の仕方を選び直すことができるようにする。 ○ 仲間の考えを聞いて、考えが広がったり深まったりした子どもの言葉を全体で共有することで、加熱の仕方を工夫することのよさを自覚することができるようにする。

3 本時の評価規準

よりおいしいご飯を炊くために、加熱の仕方を工夫し、調理計画を見直している。

(思考・判断・表現)【記述分析・発言分析】

4 板書及び対話をしている場面、子どものふりかえりの記述



○ わたしたちの班は、食感を大切にして火加減を意識した。実践①のとき、最後強火で炊いたらたくさんのおこげができてしまったので、実践②では、弱火でじっくり炊いてももちもちな食感のご飯を炊きたい。(A児のふりかえりの記述)

○ 実践①では大失敗してしまった。今日は、みんなから出た意見のよいところ取りをしたから、次は絶対に成功できると思う。(B児のふりかえりの記述)

5 指導講評

宮崎県教育研修センター 才名園 栄津子 副主幹

- どれも正解である複数の選択肢のなかから葛藤しながら選ぶということは、よりよい方法を選択する力を育むことができると考える。そのため、「自律」だけではなく、家庭科のめざす「自立」にもつながると考える。
- 仲間との対話を重要視するということは、その対話を引き出すための手立てが大切である。本時では、葛藤場面を生むために、3種類の炊き方を提示したうえで、どの炊き方がよいかを選ばせることで、対話を生むようにしていた。しかし子どもは、この場面では対話に必要感をもっていないように感じた。実践①を受けて子どもは、「自分たちの目標に合ったご飯を炊きたい」という思いを強くもっていたため、グループ内でどのような炊き方をするかについて対話をさせることで、自分たちに合った解決の仕方を選択しながら、より「自律的に学ぶ」子どもの姿を引き出すことができたのではないだろうか。

6 考察

【研究内容1：自分にとっての「生活の営み」の意味を見いだすための対話を引き出す手立て】

- 今回は、教科書の加熱の仕方(強火→中火→弱火)と、本校給食室の加熱の仕方(弱火→強火→中火)と、昔から伝わっている加熱の仕方(弱火→中火→弱火→強火)を提示し、どの加熱の仕方がよいかについて、仲間と対話させた。そうすることで、強火は短時間で炊くことができたことや、弱火にすることでおこげができにくかったこと等の、実践①の経験を基に、「強火」や「弱火」の意味に目を向ける姿が見られた。このことから、どれも正解である加熱の仕方を提示した後に、対話をさせることは、調理の仕方の見方を広げるためにも有効であったと考える。
- 3種類の加熱の仕方について対話をするタイミングについては課題が残った。子どもは、実践①を受けて自分たちで解決したいという思いをもっていた。その思いをもった子どもたちに対して、3種類のなかからどの加熱の仕方がよいかを選ばせたことによって、試行錯誤する姿があまり見られなかったため、対話させるタイミングや相手については今後も追究していく必要がある。